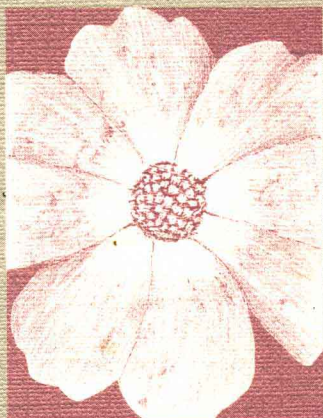


夢の崩壊

——日本近代文学一面——

村橋春洋



双文社出版

夢の崩壊

——日本近代文学一面——

村橋春洋

江苏工业学院图书馆
藏书章

双文社出版

村橋 春洋 (むらはし はるみ)

1950年(昭25) 兵庫県に生まれる

1973年(昭48) 関西学院大学経済学部卒業

1978年(昭53) 関西学院大学大学院文学研究科博士
課程修了

現在 大谷女子大学助教授

夢の崩壊

——日本近代文学一面——

著 者

村橋 春洋 ©

発 行 刷

一九九七年三月五日
一九九七年三月十五日

発行者

橋本 和夫

印刷所

(株) 暁印書館

発行所

双文社出版

〒150 東京都渋谷区渋谷一丁目二〇番地二二号

電話〇三(三四〇七) 三四四二

検印廃止

ISBN 4-88164-514-5 C3095
定価はカバーに表示してあります

夢の崩壊——日本近代文学一面——
目次

夏目漱石

「坊っちゃん」について

——物語を生きたる青年——

…
7

「三四郎」の世界

——夢の場所——

…
22

「道草」論

——近代知識人の自己解体——

…
43

芥川龍之介

「戲作三昧」論

——傀儡師の夢——

…
63

「奉教人の死」について

——永遠なるものへの憧憬——

…
78

「藪の中」論

——幻想と現実——

…
97

堀辰雄

「風立ちぬ」論

——死と愛の季節——

…
113

「菜穂子」論

——孤独にひそむ夢——

…
130

太宰 治

「満願」前後の問題

——太宰治の転機と聖書——

…
145

「女生徒」覚え書

——「野の百合」の信頼——

…
166

「斜陽」の世界

——黄昏れゆく時代——

…
177

「人間失格」論

——夢の崩壊——

…
189

あとがき

初出一覧

…
207

夏目漱石

「坊っちゃん」について

——物語を生きる青年——

一

「吾輩は猫である」の「十」が発表された明治三十九年四月の『ホトトギス』に、「坊っちゃん」は「附録」として掲げられた。漱石はこの作品を十日余りで書き上げたという。⁽¹⁾唐木順三に、「『猫』と『坊っちゃん』はお調子にのつた漱石の、出まかせの余技にすぎない。ヒステリックな、日頃のうつぶんの爆発にすぎない」というよく知られた評言がある。片岡良一もまた「坊っちゃん」を、「かんしゃくを一気にぶちまけてみようとした作品⁽³⁾」と見ている。しかし、「こういう多彩で流動的な文章を、その後漱石は書かなかつた。また後にも先にも、日本人はだれも書かなかつた⁽⁴⁾」、「この文章は胃病病みの文章ではない。健康で正気で、それから都会人の神経を働かせた文章だ⁽⁵⁾」、「明治の文学で、

『坊つちやん』ほど方言の效果に意識的だった小説も珍しいが、主人公の歯切れのよい江戸っ子口調と、生徒ののんびりしたな^いも^し、言葉の対照もあざやかである⁽⁶⁾と、評家がこぞって賛辞を呈する簡潔でのびやかな文章は、「うつぶん」や「かんしゃく」から生まれたものではあるまい。「吾輩は猫である」の諷刺を意図した饒舌な散文を書き継ぐうちに、漱石の豊かな構想力が物語への志向として鬱積し、それが噴出するようにして「坊つちやん」は書かれたのではなからうか。執筆中に虚子に宛た手紙⁽⁷⁾の中で、漱石は、「もしうまく自然に大尾に至れば名作然らずんば失敗」と記している。「九」の中程まで書いたところでのこの言葉には、この作に対する漱石の意気込みと自信とが窺える。

従来「坊つちやん」は、通俗小説、諷刺小説、あるいはユーモア小説として理解され、一面において消極的な評価を受けてきた。その際決まって登場人物が類型的であることが問題にされている。たとえば、正宗白鳥は、『不如婦』や『金色夜叉』などよりも、いやみがなくつて、いゝ通俗小説である。しかし、こゝに現はれてゐるいろ／＼な人間は型の如き人間である。こゝに現はれてゐる正義感⁽⁸⁾は卑近である。かういふ風に世の中を見て安んじてゐられゝばお目出たいものだと思はれる⁽⁸⁾と言ひ、小宮豊隆は、「性格描写といふ点から見れば、例へば赤シャツでも狸でも、野だでも山嵐でも、すべて類型の域を出ない、単純な性格だといふ事も出来るであらう。『坊つちやん』その人の性格でも、また『坊つちやん』全体のイデーでも、簡単なものの上に誇張を施して、現実的なものから、可也遠ざかつてゐると、言ひ得るかも知れない。さうして是は、一面から言へば、漱石の現実把握の力の不

足を証明するものであるのかも知れない」(傍点原文)と述べる。「かういふ風に世の中を見て安じてゐられ、ばお目出たいものだ」「漱石の現実把握の力の不足を証明するものであるのかも知れない」の言は、作者と作品の語り手とを同じ平面で扱えてのものである。「坊つちやん」を、「短いものながら、小説としての構造も行き届いたもので、漱石の一代の傑作と言つていい作品である」⁽¹⁰⁾と高く評価する伊藤整でさえ、「善玉悪玉に型をはめて人物を描いたところに、人物のそれぞれの運命や思想が底深く照らし出されていいために、やや類型的な感じが伴っている感が免かれない」⁽¹¹⁾と論じている。しかし、「坊つちやん」を「物語」として読むのであれば、登場人物が類型的であることは、その要件であるはずである。

小説「坊つちやん」は、主人公の「おれ」⁽¹²⁾が、清の死を契機にして、「親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりして居る」と、自身のそれまでの生涯を一語に集約して回顧するところから始まる。「坊つちやん」は事件が終わったあとの回想体で書かれているわけだから、この一行は、いまは街鉄の技手をしているはずの主人公の、なにがしかの感慨をこめた自己省察ということになる」⁽¹³⁾との指摘がある。ところが、十一章から成る小説の大半、すなわち、「二」の冒頭の「ふうと云つて汽船がとまると岸が岸を離れて、漕ぎ寄せて来た。船頭は真つ裸に赤ふんどしをしめてゐる。野蠻な所だ」から、終章の「其夜おれと山嵐は此不浄な地を離れた」までの部分は、過去の時間に即した語りになっている。回想の形をとった叙述は、わずかに次の四箇所ぐらいである。

・此辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んで仕舞つた。(二)

・其ほか一人々に就てこんな事を書けばいくらでもある。然し際限がないからやめる。(同)

・おれは何事によらず長く心配しやうと思つても心配が出来ない男だ。教場のしくじり先刻失策が生徒にどんな影響を与へて、其影響が校長や教頭にどんな反応を呈するか丸で無頓着であつた。(三)

・序だから其結果を云ふと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければ其時辞職して帰る所だつたがなまじい、おれの云ふ通になつたのでとう／＼大変な事になつて仕舞つた。夫はあとから話すが、校長は此時会議の引き続きだと号してこんな事を云つた。(六)

作者は「一」で、清の死を、「此三円は何に使つたか忘れて仕舞つた。今に返すよと云つたぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない」と暗示しているが、「六」では、「おれは清から三円借りて居る。其三円は五年経つた今日迄まだ返さない。返せないんぢやない、返さないんだ」と「おれ」に語らせている。「今となつては」と「五年経つた今日迄」の時間の相違は明らかであろう。現在の「おれ」の回想に挿まれた「二」から「十一」の終わり近くまでは、その殆どを坊っちゃんであつた過去の「おれ」を語り手としているのである。東京——四国——東京という小説

の背景の移ろいに合わせて、作者は巧みに現在から過去へ、そしてまた現在へと時間を推移させている。単純な青年の典型である「おれ」を主人公、視点人物とするが故に、「四国辺の中学校」を舞台とする物語の諸人物は、単一な性格・役割を演ずる類型として描き出され、事件の運びもまた軽快で平明なものになったのである。赤シャツや狸や野だや山嵐やうらなりが、「善玉悪玉に型をはめて」描かれてゐる事情は、彼らが「おれ」のつけた渾名で呼ばれてゐることからも知られよう。松山の地名を伏せて「四国辺の中学校」とし、道後を、湊石が明治二十八年四月に愛媛県尋常中学校に赴任した折の校長の名字と同じ「住田」に変え、「野芹川」や「相生村」などの架空の名称を用いたのも、あるいはそこに現実と地続きでない閉ざされた空間を作り出そうとする、「物語」としての構想に由るものであったかも知れない。

日本の近代小説の中で類稀なユーモア溢れる作品として、「坊つちやん」は今日まで多くの読者に親しまれてきている。その面白さは一に、小説の大半を占める物語の主人公、語り手として造型された、「真つ直」な気性の「勇み肌の坊つちやん」の魅力に負うものであろう。通俗小説、諷刺小説、ユーモア小説という従来の作品規定は、いずれもこの「四国辺の中学校」を舞台とする物語に対して与えられてきたものである。しかし、小説「坊つちやん」は、既に述べたような、時間構成の重層する——現在の「おれ」と過去の「おれ」の二人を語り手とする——構造の作品であることを見落してはならない。

現在の時間に戻った語り手は、突然思い出したように、「清の事を話すのを忘れて居た」と言う。

……おれが東京へ着いて下宿へも行かず、革靴を提げた儘、清や帰つたよと飛び込んだら、あら坊つちやん、よくまあ早く帰つて来て下さつたと涙をぽた／＼と落した。おれも余り嬉しかつたから、もう田舎へは行かない、東京で清とうちを持つんだと云つた。

其後ある人の周旋で街鉄の技手になつた。月給は二十五円で家賃は六円だ。清は玄関付きの家でなくつても至極満足の様子であつたが気の毒な事に今年の二月肺炎に罹つて死んで仕舞つた。死ぬ前日おれを呼んで坊つちやん後生だから清が死んだら、坊つちやんの御寺へ埋めて下さい。御墓のなかで坊つちやんの来るのを楽しみに待つて居りますと云つた。だから清の墓は小日向こびなたの養源寺にある。

読者を夢から現実へと引き戻すような抑えた静かな調子で、帰京後のことが単簡に語られ、清の死が告げられる。「御墓のなかで坊つちやんの来るのを楽しみに待つて居ります」という清の言葉を意識に留め、「だから清の墓は小日向の養源寺にある」と言い放つ「おれ」は、紛れもなく「死」の闇を視野に入れている。もはや「おれ」は、「甘え」¹⁴と評されるような現実との関わりかたをしていた青年ではない。「この作品を繰返し読むと、痛快な快男児物語と言い切つてしまえない、何かしら吹っ切

れないもの、にじみ出す寂寥感が底の方に流れているという感じが否めない⁽¹⁵⁾」と相原和邦氏は言う。「痛快な快男児物語」の背後には、その物語的世界を既に喪失した現在の「おれ」がいる。「坊つちやん」の翌年に書かれた「虞美人草」の中で、漱石は、「万人は悉く生死の大問題より出立する」と記している。小説の末尾の一文から漂う哀感は、人生の出立点によりやく立った「おれ」に纏わりつく影の如きものであろう。

註(1) 「文学談」(『文芸界』明39・9)では、「筆はさう遅い方ではありません。其中でも『猫』などは最も速く書けます。『坊つちやん』『趣味の遺伝』なども遅い方ではありませんでした。何でも学校へ通つてゐて書いたのですが、左様『趣味の遺伝』は一週間位もかゝつたでせう。『坊つちやん』は其倍位と思ひます」と述べられている。高木文雄『坊つちやん』概看(一冊の講座『夏目漱石』所収、昭57・2、有精堂)に、「執筆期間は一九〇六年三月十五日ごろから二十六日ごろまでの十二日間ほどと推定される」とある。

- (2) 唐木順三『夏目漱石』(昭31・7、修道社)
- (3) 片岡良一『夏目漱石の作品』(昭30・8、厚文社)
- (4) 大岡昇平「一冊の本」(『朝日新聞』昭41・1・9)
- (5) 小田実「文章の力——夏目漱石『坊つちやん』」(『文芸』昭54・5)
- (6) 三好行雄「鑑賞」(鑑賞日本現代文学第5巻『夏目漱石』昭59・3、角川書店)
- (7) 明治三十九年三月二十三日付の、「拝啓新作小説存外長いものになり、事件が段々発展只今百〇九枚の所です。もう山を二つ三つかけば千秋楽になります。趣味の遺伝で時間がなくて急ぎすぎたから今度は

ゆる／＼やる積です。もしうまく自然に大尾に至れば名作然らずんば失敗こゝが肝心の急所ですからしばらく待つて頂戴出来次第電話をかけます。松山だか何だか分らない言葉が多いので閉口、どうぞ一読の上御修正を願いたいのですが御ひまはないでせうか艸々」という書簡。

- (8) 正宗白鳥「夏目漱石論」(『中央公論』昭3・6、『正宗白鳥全集』第6巻所収、昭40・8、新潮社)
- (9) 小宮豊隆「漱石の芸術」(昭17・12、岩波書店)
- (10) 伊藤整「解説」(『漱石全集』第1巻、昭35・8、角川書店)
- (11) 伊藤整「解説」(近代文学鑑賞講座第5巻『夏目漱石』昭33・8、角川書店)
- (12) 稲垣達郎氏に、「主人公を呼ぶのには、かれみずからが用いている一人称の『おれ』が、むしろ穩当であらう」という論述がある(『坊っちゃん』雑談、『夏目漱石必携Ⅱ』昭57・5、学燈社)。
- (13) 註(6)に同じ。
- (14) 土居健郎『漱石の心的世界』(昭44・6、至文堂)に、『坊ちゃん』の秘められた甘えはしかし清に對してばかりでなく、実は山嵐やその他すべての人にも向けられていたと考えられる」とある。
- (15) 相原和邦『『坊っちゃん』論』(『日本文学』昭48・2)

二

……運命の二字は昔から知つてたが、たゞ字を知つてる丈で意味は分らなかつた。意味は分つても、納得が六づかしかつた。西洋人が筍たけのこを想像する様に定義丈を心得て満足してゐた。けれども人間の一大事たる死と云ふ實際と、人間の獸類たる坑夫の住んでゐるシキとを結び附けて、